一橋大学大学院言語社会研究科
〈生表象の動態構造――自伝、オート・フィクション、ライフ・ヒストリー〉

私小説・亀裂・モダニティ

――日本／中国の視角からの再考――

飯田祐子（神戸女学院大学）

書くことと〈告白〉

坂井洋史（一橋大学）

窃視的主体、都市遊歩、そして「日記」

日時　２０１２年１月２１日（土）　午後１３時３０分より
場所　一橋大学 東キャンパス 国際研究館 4F 大教室（中央線「国立」下車）
連絡先　森本淳生（一橋大学）　atsuo.morimoto@r.hit-u.ac.jp
主催　科学研究費補助金・基盤研究(B)「生表象の動態構造――自伝、オート・フィクション、ライフ・ヒストリー」

趣旨説明　13:30-13:40

書くことと〈告白〉　13:40-15:00
飯田祐子

【概要】日本において自己を語る小説が現れるのは明治末期である。それらは、後に「私小説」と名指される小説群につながる。自己を語る語りは、どのようにはじまりどのように変化していったのか。「私小説」（あるいはそのはじまり）をめぐる議論の中心に置かれてきた田山花袋の『蒲団』から志賀直哉の『和解』、そして太宰治の分裂的な自伝的小説群まで、それぞれが〈告白〉からいかにずれているかを測ることで、書くという行為と自己のあり方との関係について考えてみたい。

窃視的主体、都市遊歩、そして「日記」　15:10-16:30
坂井洋史

【概要】中国近代の作家、郁達夫（1896-1945）は長い日本留学期に受けた日本自然主義、とりわけ私小説の強い影響の下に、作家としての経歴を開始したとされる。郁自身も、〈ナラティヴ（一人称叙述）／テクストのリアリティ／作者のテクスト支配〉を一体視する、いかにも「私小説家」らしい見解を示したが、実際に彼が小説の中で次々描き出したのは、自らの存在を透明化し、ひたすら窃視の眼差しを対象に注ぐことによって、他者の〈注察／監視〉による相対化から逃れようとする「窃視的主体」の姿であった。この「主体」は、群集の無名性や闇夜の裡に身を隠し、思うがまま周囲を「窃視」することでかろうじて成立する脆弱な存在であると同時に、恐らく中国文学史上に初めて「都市遊歩者」という形象を提供することとなった。しかし郁達夫自身は、テクスト支配に懸けた古典的な欲望と、それを裏切る主体の脆弱性の確認の間で引き裂かれざるを得なかった。この分裂を統一する「場」として、郁の発見したのが「日記」エクリチュールであり、それを端から公刊するという倒錯的な行為の中で、彼は小説テクストにおいて取りこぼした「主体」の回復を果たしたのであった。報告では、題目に掲げた三つのテーマを柱に据えた、郁達夫再評価の大筋を示したい。

ターブル・ロンド　16:40-1800